

大阪再発見VOL2

ちんちん電車に乗って帝塚山へ ～ 新旧文化が織り交ざり、まちはゆるやかに開かれる～

“松虫・東天下茶屋・北畠・姫松・帝塚山4丁目...”。阪堺電気軌道・上町線（以降、上町線）には歴史を色濃く残す美しい駅名が並ぶ。ちんちん電車とも呼ばれるこの路面電車は、昨年九月で百周年を迎えた。

落ちていたたたずまいの松虫から北畠界隈は、熊野街道を軸とした歴史の散歩道が整備されるだけでなく、貴重な史跡が住民の健闘で残されている。その南に隣接する帝塚山は、帝塚山古墳を中心に、現在の南海電鉄高野線と上町線の間広がる邸宅街をさす地名として使われており、東成郡住吉村が大阪市に編入された折、阿倍野区と住吉区にまたがる形となった。当初は、姫松を中心に、北限は北畠から住吉高校、南は帝塚山学院あたりまでを呼んでいたようだが、今では境界が曖昧になり、帝塚山と呼ばれる地域がやや広がっているようである。かつて、高級住宅街・学園都市として、しゃれたお店が多いことでも有名であった。大学の移転などで、その華やぎが失われたという声もあるが、近年、新たな展開を見せている。

今回、ちんちん電車に乗って、松虫から帝塚山を探索することにした。小さな店を覗きながら歩く。由緒ある神社もある。大きな邸宅が美しいまちなみをつくっている。どの通りも明るくゴミがない。そんなこの界隈の素顔や取り組みをとらえ、時代を超えたまちの不易と流行を考えてみたい。

写真 帝塚山をのんびりはしるちんちん電車（「姫松」界隈） 大邸宅が並ぶ美しいまちなみ

1. 歴史が息づく散歩道、“松虫・東天下茶屋・北畠”界隈 ～ 阪堺電軌上町線、途中下車の旅案内 その1～

天王寺から住吉・堺まで続く、阪堺電気軌道（以下、阪堺電軌）上町線は、まさに上町台地の上を走る路線である。

上町台地は、大阪城のあたりから南にのびる台地であり、六千年前は、細長く海に突き出る半島であった。台地の西側はすぐ海が迫り、波によって急な崖になっていた。海面の下降と川が運ぶ土砂により、現在の地形へと変化してきたが、現在も残る台地西側の急な斜面や坂道が、当時の様子を物語っている。今のように高層建造物も少なく、このあたりからみる西方の景色や夕陽が特に美しい景観であった。まさに観光ルートである。この上町台地には、歴史的なエピソードが数多く残存し、それらを今日に伝えるべく、貴重な史跡が、上町線の線路にほど近いところに集中している。

<松虫塚とエノキ、聖天山のクスノキ、岸の姫松～住民がまもった大樹～>

上町線の周辺は、昔は、原野や松林の丘など自然美あふれる所であったという、その面

影を残す大樹や史跡が、住民な熱心な活動により保存され、今も愛され続けている。

「阿倍野」駅を経て「松虫」駅で下車、西へ歩くこと七分。交通量が多い道路・木津川平野線沿いに「松虫塚」がある。この松虫周辺は、昔は見渡すばかりの原野で、初秋には虫の音が響きわたり、特に松虫（鈴虫）の名所であったため、松虫にまつわる物語が伝えられている。その一つは、二人の親友が、月の美しい夜に、松虫の声を愛でており、虫の声に聞き惚れた一人が草むらに分け入ったままそこで死んでいったのを、残った友が泣く泣く埋葬したという伝説。また、後鳥羽上皇の官女、松虫・鈴虫が、法然上人の法話に感銘して出家し、この地に庵を結んで余生を過ごし、法然が一心寺に滞在した折は法話を聞きに通ったという話もある。

「松虫塚」と刻んだ石碑の後方には、樹齢約八百年のエノキの神木がそびえているが、これは住民の保存運動により今日に残されたものである。昭和五十一年頃、大阪市の道路計画によりエノキが切り倒されることになっていたが、地元住民による丸山連合町会の熱心な運動で、土木局との話し合いの結果、塚のところだけ車道をカーブさせ、ふじ棚・照明灯などもつけて、保存が実現したという。「松虫」という名は、路面電車の駅名や地名に残される程この地域に根づいており、住民に守られた“松虫塚”と“エノキ”が、その象徴としての役割を果たし続けることであろう。

さて、松虫塚をさらに西へ行くと、「聖天山」に出る。この高台は眺めがよく、昔は松茸狩りが楽しめる美しい山であったが、終戦後、戦災の復旧工事のためにこの森林や土地が削り採られた。その際、地元の人が交代で見張って、業者との話し合いでようやく守られたクスノキがある。現在、公園地としてこの土地を買収した大阪市の理解もあり、聖天山公園に1本残されて大切に保護されている。

ちんちん電車に「姫松」の駅名がある。昔、帝塚山から少し北あたりは、松林が広がっており「姫松」という地名も古くからあるようだ。「住吉名勝図会」にも「岸の姫松」とかかれた松林の丘が描かれている。海が近く、暴風林としての役割も果たしたのだろう。この松原の名残の松の木も現存している。場所は、府立住吉高校のグラウンドの道路沿いで、保護するために、グラウンドのネットには枝のところに穴があげられている。晴明丘連合町会の大阪市への働きかけで、道路工事の際にも松の根元に土を残すことになり、松は枯れることなく保存されている。

風光明媚を誇ったまちの歴史を忘れまいと、遺産を守り抜いた住民の心意気は、もうひとつの伝説になっている。

- 写真 住民の熱心な活動で残る「松虫塚」
2 「松虫塚」のために、車道がカーブしている（左が松虫塚）
聖天山公園に残る、貴重な「クスノキ」
住吉高校のグラウンド道路沿いで保護された「松」
「住吉名勝図会」より 松虫塚
「住吉名勝図会」より 岸の姫松

路面電車沿いにまちを南北に貫いている街道筋が、有名な「熊野街道」である。

「熊野街道」とは、和歌山県熊野本宮への参詣道である。平安時代から鎌倉時代にかけて、上皇・貴族をはじめ一般庶民までお参りすることが流行した。和歌山の南には、熊野本宮・新宮・那智大社の三つの神社があり熊野三山と呼ばれており、お参りすると必ず極楽浄土へ行くことができるという信仰により、この聖地へ赴く人が絶えなかった。「蟻の熊野詣」と呼ばれる程の賑わいが室町時代頃まで続いたという。京方面からは、まず船で淀川を下り、今の天神橋と天満橋の中間にあたる八軒家に上陸し、四天王寺、阿倍王子神社を通過して住吉神社を経て、遠里小野から堺に入った。この道は、今は歴史の散歩道として整備され、「熊野かいどう来歴碑」が三か処（阿倍野交差点の東南角、松虫交差点西南の旧街道入り口、旧街道を南下して上町線と合流する付近）、「熊野かいどう」道標（天満橋八軒家からの距離が記されている）が十基、立てられている。

熊野詣の途中の街道には、熊野九十九王子と呼ばれた王子社ができた。「王子」とは、熊野三山の末社という意味で、京都から摂津、和泉を経て熊野に至る街道の途中に、休憩と遥拝のために設けられたお宮で、土地の名前をつけて王子と呼ばれた。「阿倍王子神社」は、阿倍野の王子社というわけで、四天王寺と住吉大社のちょうど中間の位置であった。王子社の中には、熊野信仰の衰退とともに退転してしまったお宮もあるが、ここは、中世以降阿倍野村の氏神として信仰され、現在にいたっており、大阪府下では唯一の旧地現存の王子社として栄えている。創建は仁徳天皇と伝えられるが、一説には、古代に活躍した豪族、阿倍氏の創建ともいわれる。

写真 阿倍王子神社

熊野かいどう来歴碑 ?

2 熊野かいどう道標 ? (は、最低どちらか1つ)

< 安倍晴明生誕の地と「安倍晴明神社」 >

かの有名な陰陽師“安倍晴明”公は、延喜二十一年（九百二十一年）今の阿倍野元町（上町線の東天下茶屋 北畠駅間の沿線東の辺り）で生まれた。

幼少時、京都で陰陽道の大家、加茂忠行・保憲（ただゆき・やすのり）父子に天文道を習い、成人後、天文博士・陰陽師として天皇や皇族に仕えた。陰陽師というのは、陰陽五行思想や、暦学、天文学、呪法などを用いた、占い師のようなものである。朝廷につかえる役職として、晴明自身は、その特異な力を評価され従四位下という位を授かっており、かなりの発言力をもっていたようだ。『今昔物語』には、安倍晴明が、式神（主人である陰陽師の命のままに動く鬼神）を用いた奇跡、柳の葉を投げただけで蛙をつぶした話など、不思議な才能について記述が残っている。その人間ばなれした能力から、信田の森に住むきつねの子であるという「葛之葉子別れ伝説」が生まれた。

* 葛之葉子別れ伝説

安倍保名が信田森で助けた白狐が、“葛の葉”という女性に化けて彼のもとへ 通い、そのうちに2人は結婚し、子供をもうけ“安倍童子”と名づける。しかし、子供に狐の正体を見られた葛の葉は、「恋しくば尋ねきてみよ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」と障子に書き残して森へ帰ってしまった。母に会いたがるので、保名が森へ連れて行くと葛の葉 があられ、童子に灵力を

授けた。この童子が後の晴明である。“葛之葉子別れ伝説”は、江戸時代に竹田出雲作「芦屋道満大内鑑」（アシヤドウマンオオウチカガミ）となって、歌舞伎や文楽でも上演され、有名になった。

地元では、晴明の父親である“安倍保名”も親しまれており、郵便局の名前にもなって残されている。

安倍晴明神社は、晴明公没後二年の寛弘四年創建された。江戸期には大社の一つとして格式ある神社であったが次第に衰微した。明治期には石碑と小祠だけであったが、大正十四年、阿部王子神社の末社として復興した。この数年、安倍晴明ブームは衰えを知らず、休日などには、遠隔地からの参拝客でかなり賑わう。境内では、占いコーナーも設けており、九月二十六日の命日にちなんで、集会や占い祭りが開催された。二〇〇五年は晴命没後千周年となるため、どのような記念行事を行うか、地元の人は今から案を練っているようだ。

安倍晴明神社・きつね像

安倍晴明神社

「安倍晴明さま。やっと来ることができました」「母親の難病が治りますように。」
絵馬には、遠く沖縄や北海道の住所が記されていた。平日は閑静な神社だが、休日には、日本全国から訪れた大勢の参拝者で賑わう。

陰陽師 映画チラシ

「陰陽師」安倍晴明のブームが続いている。夢枕獏著の小説や岡野玲子作の漫画コミックがきっかけとなり、テレビドラマや映画でも主題となる程の人気である。

(コラム) あちこちに残るまちものがたり

< 阿倍野神社は、北畠顕家が戦った古戦場 > (写真 北畠顕家像)

「北畠」駅の名は、北畠顕家公に由来したものである。北畠顕家とは「神皇正統記」を著した北畠親房の長子で、後醍醐天皇の新政（建武中興）時代に活躍した。

顕家が足利尊氏軍の高師直（こうのもろなお）と戦った古戦場が、現在の「阿倍野神社」で、親房・顕家の両公がまつられている。かつてNHK大河ドラマでこの親子を演じた俳優の近藤正臣さん、後藤久美子さんも、この地へ参拝に訪れ、話題を集めたという。

< 阿倍野に隠住んでいた吉田兼好 >

摂津名所図会「兼好法師阿倍野でわらを打つの図」

「徒然草」の作者として有名な吉田兼好は、阿倍野に隠れ住んでいた時期がある。北畠親房と親交があった兼好は、二一歳の若さで戦死した親房の息子顕家の霊を慰める意味もあり、丸山の古墳（聖天山の北側、現在の丸山通二丁目）ふもとで藁を打って暮らしたという。その藁打石は、海照山正円寺の「大聖歡喜天」の標碑の台石として残っており、兼

好文学碑も聖天山テニスコート近くに建てられた。

< 朝陽館 > 邸内写真

明治四十年（一九〇七）道修町で薬問屋をしていた小西久兵衛が建てた別荘で、政府の要人から皇族方 大隈重信、斎藤實、鈴木貫太郎、宮家では北白川宮、東久邇宮、閑院宮、竹田宮の各殿下 など著名な方が来遊、宿泊された。現在は、小西久兵衛の孫にあたる、小西欣一氏（朝陽学院理事長）の管理のもと、朝陽幼稚園内に入り口が設けてある。ほとんどが当時のもので、館内各所、細かな彫刻や御殿の大広間の襖絵・飾り金具があり、豊かな緑と池がある庭には野鳥が飛んでくるとのこと。季節によって、節分の豆まきや雛祭り、虫取りなど、朝陽幼稚園の子供たちは、贅沢な遊びを楽しんでいる（現在は、一般公開はされていないが、地域や学校関係の集会に提供されることもある。）

その他、伊藤静雄文学碑・織田作之助来遊の地の碑など、文学人がこの地域で過ごしたエピソードが語り継がれ、播磨塚・小町塚、経塚など、昔から残る塚も、場所を変えながらも保存されている。

コラム：阪堺電気軌道～ちんちん電車のあゆみ～

現在、大阪で唯一残っている路面電車が、阪堺電気軌道である。昔にタイムスリップしたような車体、ゆっくりのスピード感の魅力にくわえ、車両外面に大きく描かれた広告、時にはカラオケ付き宴会電車を走らせるなど、その経営努力と企画力により今日まで生き残った貴重な遺産である。

現在のの上町線は大阪馬車鉄道（株）として、阪堺線は阪堺電気軌道（株）として誕生し、時を違えて南海鉄道と合併、その後独立分離して今の姿になっている。

< 上町台地を走っていた馬車鉄道 >

阪堺電気軌道の路面電車のはじまりは、実は“馬車鉄道”であった。

明治三十（一八九七）年、大阪馬車鉄道（株）設立、明治三三年九月二十日開業。上町台地を南北に貫く「天王寺西門前 東天下茶屋」間の約一・七kmルートを馬に牽かれた客車が軌道の上を走った。これが大阪の路面電車の発祥であり、また現在の阪堺電気軌道上町線の前身である。当時、聖天山・阿倍野神社一帯にあった天下茶屋遊園地（明治二十七年開設）に訪れる人が増えてきたのが馬車鉄道設立のきっかけであった。

明治三十三年十一月には上住吉（現在の神ノ木）まで、さらに二年後の三十五年十二月には下住吉（現在の住吉）まで延長され、四天王寺から住吉大社までを結ぶ観光鉄道としても人気を集めた。一方、大阪馬車鉄道開業の一か月後に、南海鉄道天王寺支線（天王寺 天下茶屋間）が開業、利用客の争奪戦となった。特に明治三十六年第五回内国勸業博覧会の開催時は、第一会場の天王寺村（現在の天王寺公園から新世界一帯）と第二会場の堺の大浜公園 とで、入場者が五か月で五百三十万人と、当時の大阪市人口の五倍強にあたる集客であった。南海電鉄は「博覧会会場門前」臨時停車場を設置する等の健闘で五割余の増収を記録したが、大阪馬車鉄道の増収は三割にとどまった。

明治三十七年の日露戦争後、馬車鉄道は限界を迎えていた。馬の飼料費の高騰や馬の健康管理、糞尿処理などの費用が経営を圧迫しており、乗客数の増加に対応するには、馬力より電力だと考え、名称を、“大阪電車鉄道”とし、さらに“浪速電車軌道”と改称、四十一年一月三十一日、馬車鉄道の営業を廃止した。

浪速電車軌道は、電化改軌工事を進める中で、明治四十二年（一九〇九）十二月二四日、南海鉄道と合併し、明治四十三年十月には、南海電鉄上町線として、天王寺西門前 住吉神社前（下住吉）間で複線の電車運転が開始された。大正二年七月、住吉神社前から住吉公園まで路線延長、大正十年には、起点駅が天王寺西門前から天王寺駅前となった。

< 阪堺電気軌道 >

明治四十三年、阪堺電気軌道株式会社が設立された。その名の通り、大阪と堺の都市間交通（電車）として、四十四年十二月、恵比寿町 大小路（市之町）間で開業後、四十五年三月に少林寺橋（現・御陵前）まで、四月には浜寺（現・浜寺駅前）まで開通した。また大正三年には平野線も開業した。

既に同路線に開業していた南海電鉄は、強力なライバルの出現に対抗策を打ち出した。浜寺には白亜の公会堂・園遊場や海水浴場を開設、急行列車にはビュフェを連結、あるいは車両によって運賃を半額にするなどサービスを強化した。阪堺電軌は、水族館のある大浜公園を借り入れ、大浜汐湯を開業。浴場や喫茶室、運動場やテニスコート、また大浜海水浴場と連絡する回遊大栈橋の建設などで、施設を拡充し、季節によりイベントを開催した。このようにサービス競争がエスカレートして、このままでは共倒れになり、両社協調すべきだとの気運が高まり、財界の思惑もあり、大正四年四月、阪堺電軌は南海電鉄と合併、南海電鉄阪堺線となった。

昭和十九（一九四四）年六月、南海鉄道は、関西急行鉄道と合併、近畿日本鉄道株式会社となった。この巨大私鉄は、戦時下の国策で組織されたにすぎないので、昭和二十二年、南海と関西急行は合併前の姿にもどることになり、上町線、阪堺線、旧南海鉄道に属した鉄道線を、新発足した南海電気鉄道が引き継いだ。（関西急行は、社名を戻さず近畿日本鉄道のままとした）。

自動車の激増・渋滞から都市交通機能の改善を目指して、大阪の市電が廃止されたのは昭和四十四年であった。昭和五十五年、もうひとつの路面電車南海平野線が廃止され、阪堺線と上町線の二路線が南海電気鉄道より分離独立して、南海電鉄全額出資の阪堺電気軌道株式会社となり、現在にいたっている。

コラム写真 [現在のちん電](#) . < なお、 [は](#)、他のページでもいい >
[馬車鉄道](#) ... [山田小三郎氏画](#)
[馬車鉄道跡碑](#) 開業百年を記念して、上町線東天下茶屋停留所ホームに建てられた。大阪市教育委員会による「大阪市史跡顕彰碑」のひとつとなった。

（コラムおわり）

2 . 船場の商家がつくったお屋敷まち・帝塚山

～ 阪堺電軌上町線、途中下車の旅案内 その2 ～

< 奇跡的に残存する前方後円墳 「帝塚山古墳」 >

帝塚山の地名の由来でもある、“帝塚山古墳”は、阪堺電軌上町線「帝塚山3丁目」駅から西へ、南海高野線帝塚山駅を超えた場所にある。そのこんもりと繁った緑の丘に登ろうと思えば、帝塚山学院に申し出れば鍵を貸してくれる。

この古墳は、四世紀末～五世紀初めに築造されたと推定されている。墳丘長約百二十メートルの前方後円墳だが、市街地でこれだけ完全な形で残されているものは珍しい。(生野区の御勝山古墳は、前方部が道路や公園に姿を変えているし、茶臼山については、古墳説に疑問がもたれているという話もある。) 宅地造成ブームのために多くの古墳が破壊された中、帝塚山古墳が奇跡的にも保存されたのは、こんな訳がある。

大正十四年、大阪市が東成・西成両郡を編入させ、帝塚山を含む住吉村も大阪府域となった。合併された町村のなかでも住吉村は最も富裕であったが、豊かな村の財政で実行できた諸施策が市編入のために後退してしまうのを心配した村長は、莫大な村有財産を大阪府に引き継がせるのではなく、村独自で活用しようと「財団法人住吉村常盤会(以降、「常盤会」と略す)」を組織した。今池、万代池、北畠、帝塚山など、「常盤会」の資産となったのは二万坪以上もあり、そこに帝塚山古墳が入っていた。「常盤会」は、それ以降、宅地造成のための買い入れ申込みを断り続け、自由に出入りできるが故に荒廃しかけていた古墳域の周囲に柵を設け植樹を実施する。(帝塚山学院の協力も大きく、今見るヒマラヤ杉は生徒の手で植えられた)。その間にも堀は埋め立てられ、古墳との境界線ぎりぎりまで家が建てられたが、最大限維持保存に力を尽くした。さらに、この文化遺産を後世に残すため運動を重ね、昭和三十八年、国史跡指定を受けている。

名称は、もともと、「手」塚山であったが、明治三十一年十一月、摂河泉の陸軍大演習の際、明治天皇がここで観戦されたので、「手」が「帝」と変わったという説が有力である。帝塚山古墳にその記念碑が立てられている。埋葬者は、古代の有力豪族であった大伴金村とも言われているがはっきりしない。古代この地に勢力をもった人物がいたことは推測できる。また、この古墳の南側にさらに大小の古墳があり、「大手塚・小手塚」と呼ばれていた(大帝塚山古墳は、今の南海高野線帝塚山駅が中心となるあたり、小帝塚山古墳は、住吉中学校のあたりになる)。さらに、聖天山も古墳と考えられ、古地図に、金塚・小町塚・播磨塚・柘榴塚・経塚などの名前が記されていることから、幻の帝塚山古墳群ともいえる文化圏が存在していたという考え方もある。当時、岬状であった上町台地の西辺にあたるこのあたりが生活圏として開かれていたことは、弥生時代から古墳時代の生活用具や住居跡が発掘されたことから想像に難くない。

* この古墳が、浦島太郎の墓だという説もある。万葉集には、浦島太郎はヨサミの国の人とされている。(現在ヨサミは丹後の国のヨサミだという解釈がされているが) 住吉にも“依網”の地名が残されている。「大手塚・小手塚」も、『摂津誌』では「大玉手塚・小玉手塚」と記されており、“玉手”の由来を「玉手箱」へと考えることもできる。突飛な仮説としても、古代ロマンあふれるはなしである。

< 学校とともに形成された、高級住宅街 >

帝塚山は、元来は「住吉の岸の姫松」と言われるような、一面松林が広がる地域であり、その水利難から長らく甘藷やそば畑となり、苗木栽培が行われていた。明治後期になり、天王寺のターミナル機能が充実し阿倍野の宅地化も促進される中、南海電鉄の開通をきっかけに開設された天下茶屋遊園地やその跡地利用により聖天山付近の住宅街ができたが、その一方で形成されたのが、帝塚山の住宅街である。

大阪馬車鉄道・(旧)阪堺電気軌道を契機として、船場の大家であった糸屋や染料屋の経営者が、帝塚山・北畠間を住宅地に開発しようと、東成土地建物株式会社を運営したのが、明治四十四年頃。当時は、第一次大戦後、物価騰貴と都市人口が急増する状況の中、船場の商家では、店舗と家を切り離し、広い住まいを求めて郊外に移転し始めた頃である。既に高級住宅地化していた芦屋や浜寺に対して、もう少し大阪の市街地に近い場所として、この地域の開発と分譲に踏み切った。さらに地域の付加価値と、子供たちの教育の場の必要性が重なって、共同出資により学校を創設することになる。土地会社としては、高く売れる見込みのある姫松ではなく、帝塚山古墳の東隣の土地を提供し、帝塚山学院(もとは、姫松小学校)が創設された。大正六年五月のことである。

エリート教育を目指したこの帝塚山学院をはじめ、大阪女子大学、関西外国語短期大学、住吉高校、阪南中学、住吉中学、住吉小学校なども含めて、学園都市として発展し、まちのイメージも向上、高級住宅地が形成された。その住民の生活をより贅沢に彩るような、高級レストランやブティックなども軒を連ねるようになった。

しかし、時勢の移り変わりとともに、まちの様相も少しずつ変化してくる。まず、学生の数が減った。大学が相次いで郊外へ移転したのである。学生数の増加によりキャンパスが狭くなったのが主な理由だが、昭和五十一年府立女子専門学校・現大阪女子大学が堺へ、昭和五十九年、関西外国語短期大学も枚方へ移転し、昭和六十一年、帝塚山学院の短大も、泉ヶ丘の方へ移る。(女子専門学校跡地にある府立貿易専門学校も来年廃止となる予定である)。まちの発展を支えてきた教育施設がことごとく姿を消す結果となった。一方で、世代交代や相続税の関係などで、大邸宅が分割され建て売り住宅となったり、マンション建設も相次ぐなど、いわゆる“閑静なお屋敷まち”の趣が崩される処が出始めた。同時に、売り上げが悪くなった店舗も、オーナーが変わったり撤退するなど、店の建物ごと取り壊される例も出てきて、まちに活気がなくなってきていた…。

写真 帝塚山古墳

帝塚山学院大学

2 1 大邸宅が軒を連ねる

2 2 . 甘さひかえめのケーキ屋がおいしい「ポワール」

2 3 ミューズコート

2 4 チーズケーキで有名な「フォルマ」 (ただし、2 2 ~ 2 4 のうち
2 つ以上なら OK)

3 . 帝塚山を元気な街に！～成長するイベント・帝塚山音楽祭～

帝塚山音楽祭がスタートしたのは、そんな折であった。「このままでは、帝塚山のまち

が衰退してしまうのでは…」という危機感のもと、なにかを通じてまちを元気にしたいと立ち上がったのが、阿倍野区・住吉区にまたがる帝塚山地区の、お店の経営者たちである。たまたま音楽それもジャズが好きな人たちだったため、発案されたのが「帝塚山ジャズフェスティバル」であり、昭和六十二年十一月七日・八日、第一回目の音楽祭が開催された。プロのミュージシャンを呼んで、昼は万代池の特設ステージでコンサートを、夜はストリートライブ、つまり、パブや喫茶、レストラン・バーなど十店舗ほどでミニコンサートを行ったのである。それ以降、年に一回開催され、回を重ねるごとに協力者も少しずつ増え、評判も高まり規模も大きくなっていった。

今年の五月に開催された第十五回帝塚山音楽祭は、第一回目とは比べものにならないほど充実した内容になった。ライブストリートでは、参加店舗が十五店舗と過去最高になり、一昨年から行われた、路面電車でのチン電ライブショー「ライブ・ダ・チン」も目玉としてさらに人気を得た。出演者の数も倍増し、ジャンルも、ジャズを中心に津軽三味線やダンス（フラメンコ・バレエ・日本舞踊）まで幅広く、昼過ぎから夜まで、各店舗で同時多発的にライブが行われた。ライブ一日共通チケット（前売り二千五百円、当日三千円）でどのライブも楽しめるようになっている。この値段でプロの演奏を真近で楽しめるとは、贅沢な話である。

もう1つの大きな会場である万代池公園では、三つの野外特設ステージでの演奏（ジャズ・バンドはもちろん箏曲・アイルランド音楽、地元の住吉中学学生とOBによる吹奏楽、帝塚山高等学校生のギターマンドリン演奏等）やダンス（クラシックバレエ・ジャズダンス・フラメンコ・ソシアルダンス等）が盛りだくさんの上、周辺では、フリーマーケット、カクテルパフォーマンス、あめ細工、野点茶会、トランポリンなど、ところ狭しと並び、二日間飽きることなくたっぷりと楽しめるほどの出店状況となった。

いまやすっかり定着した音楽祭だが、毎年、店主も参加者も変わる。ノウハウを継承しつつ、一から準備することがほとんどだという。スタッフは全員ボランティアで、手作りにこだわる。一年近くかけて準備を進めるが、中心となって企画運営するメンバーを更新することで、さらに地域の人脈を深めようと試みている。

そのスタッフを中心とした帝塚山への愛着と熱意が、年を重ねるごとに地元の協力と理解を深め、ファンを増やしていくのだろう。

おはなし

音楽祭は、市民を育てる

森一貫氏（ 第一回帝塚山音楽祭実行委員長 帝塚山大学教授 ）

私は生まれてからずっと帝塚山で育ちましたが、このまちが元気を失い始めたのは、やはり大学の移転が大きいと思います。特に帝塚山学院は、このまちとともに成長してきた。周辺の子供さんはほとんどこの学院へ通って、「帝塚山文化圏」をつくっていました。これからも一緒に協力していく立場にあるのに、正門前の土地を手放したり大学を郊外に移転したりして、とても残念だと思う。一方で、新しくこのまちへ来た店のオーナー達が、古くからあるお店や私のような根っからの帝塚山住民と、新旧の交流をしたいという思いを持っておられ、それがまちの活性化へもつながらないかという話に発展して、一回目の

ジャズフェスティバル開催へ動き出したわけです。いいまちには、いい店があり、いい人がいる。それらが、イベントを通して育ち、交流できればいいなあと考えました。

やはり、学校にしても住民にしても、その地域に住むなら、地域を支える責任をとる意識が大切だと思うんです。今、帝塚山に残されている美しい自然や景観、例えば、帝塚山古墳や万代池周辺など、地域の資産を守ろうとする「常盤会」の熱意が反映されている。そういう地域への愛着や志をもつこと、それが本当の「市民」のありようで、そういう人やお店が、帝塚山にもっと増えるといいですね。その契機としての音楽祭への期待は大きいです。

おはなし 手作りのイベントで、まちの活性化を。

「ラグタイム」オーナー 仲一馬 氏

「ラグタイム」は地域の“ホームバー”

二十年程前、自分が行きたいと感じるような店をつくったのがここです。お酒は六千種類、料理の種類も増やして選べる楽しさが欲しい。活字が好きな人のためには、文字が読める明るさと新聞や雑誌類を常備する必要がある。いつでも来れるように、三百六十五日営業しています。内装もリビングでくつろぐイメージにしようと考えました。いわゆるホームバーなんです。開店してからは、ここに通ってくれる地域の方々も顔見知りになってきて話を聞いていると、なんか元気がない。景気が悪い話ばかりでした。同業者同士も、帝塚山に古くからある店ほど、相手を悪く言って自分の所を良く思わせるような言い方をしていたし、お金持ちのお客さんで横柄な態度の人もいました。みんなで手をつないで良い方向へ行けないものかと思っていました。

“ジャズ・バー”から“ストリートライブ”へ

私は昔からジャズが好きで、店にもレコードを流していたところ、お客さんから「ライブをやってほしい」と言われたんです。それで大学生のジャズクラブや、地域で教えている人による、“帝塚山ジャズファミリー”と題したバンドで、生演奏をやった。ライブのチャージ料も少しですがいただきました。そうしたら、ジャズ好きな人が集まってきます。昔ミナミでデュークという店をやっていた池田さんもふらっと来てくださったり、帝塚山大学の森一貫先生もよくいらしてたのですが、私を含めてこの3人が発起人となって「このままではあかん。協力して、街が元気を取り戻すようなイベントをやろう」と思い立った訳です。それで、皆が好きなジャズをテーマにした企画が、“帝塚山ジャズフェスティバル”だったんです。

お祭りの間だけ、帝塚山のお店をライブハウスにしようという「ストリートライブ」を実現するため、一軒一軒お店をまわって協力を求めました。帝塚山にはライブハウスがないですから、バーだけでなく、喫茶店や花屋さんや寿司屋、美容室などもその日だけライブハウスに変身させようという考えです。最初は、ジャズフェスティバルと言ってもなんのことかわからないので、理解を得にくかったし、「うちは、狭いからたくさんの人が入れない」「楽器や器材を置く場所がない」とか「ギャラが払えない」とか、難色を示していた店主が少なくなかった。発起人の三人が入れ替わり説明に行き、ギター一本で演奏するミュージシャンの起用や、ギャラはチケットの売り上げから払うことにするなど、工夫することで、協力してくれるお店が出てきました。初回は、非常にこじんまりしたお祭り

でしたが、回を重ねるごとに、ストリートライブへの参加店舗が増えた。地域のセミプロやアマチュアのグループも参加したいと言ってきたり、帝塚山のフラメンコ教室やバレエ教室なども発表会をしたいと希望してきたり。それで、ジャズに限らず「音楽祭」として、万代池周辺のステージを当初の一つから三つに増設することになったわけです。

世代を超えた、交流の場に

フリーマーケットもいまや出店希望者が多くて、すぐに一杯になります。当日は、家族連れはもちろん、七十～八十才位のお年寄りも多いです。ジャズが、昔懐かしいイメージを持っているからかもしれません。世代を超えた地域の交流の場になっています。音楽祭では、とにかく帝塚山が大勢の人で混雑して、結果、どのお店も大繁盛です。祭りの次の日には、またもと通りの静かなまちに戻るの、音楽祭の効果は、直接的にはわかりにくいですが、隣近所の人同士であいさつすることが増えたのではないのでしょうか。音楽祭で知り合いになることが多いようです。豪邸に住むお年寄りなどは、日々の買い物も、電話で宅配サービスをたのむようですから、地域で人と会う機会がなかったのですね。また、フリーマーケットの出店者どうしが、隣のまちのイベントで偶然出会ったりして、地域を超えた交流の機会も提供していると思います。

最近の帝塚山については、大邸宅がマンションに変わってきていますが、景観は失われる一方で人が増えますから、アイデンティティとしての上品さをまもりつつ、まちがにぎやかになってきたら、嬉しいですね。

25 ラグタイムオーナー 仲一馬さん（左）

26 タグタイム 店内

27 帝塚山音楽祭 ちん電ライブショー「ライブ・ダ・チン」

ちんちん電車を借り切って、姫松駅から天王寺駅前駅、住吉公園駅から姫松駅の 区間での“走るライブショー”は、非常に好評を得ている。

28 帝塚山音楽祭 ストリートライブ（ラグタイム）

29～31 帝塚山音楽祭 万代池公園で。（31は削除してもいい）

32 万代池公園

江戸時代に上町台地の谷をせき止めてつくられ、明治初期まで灌漑用に使われていた。昭和のはじめには共楽園という遊園地として賑わっていた。その名前の由来については、「聖徳太子が人を遣わせ曼陀羅経をあげさせて魔物を退治したことからついた名称「曼陀羅池」が訛ったという説があり、また、古墳とそれを囲む濠の一部だという推測もあり、神聖な池として今日まで残され、市民の憩いの場となっている。桜の名所でもある。

おはなし 土蔵の稽古場が原点

帝塚山スタジオ 市川恵子氏

世界的に活躍するフラメンコ舞踊研究家の市川恵子さんは、“帝塚山”を活動の起点と

されている。帝塚山西4丁目の住宅街にあるその稽古場へうかがった。

土蔵を改造して、フリースペースに。

このフラメンコのスタジオは、私がお嫁に来た市川家の土蔵を改造したものです。その原形を復元して残したいと思ったんです。はじめは二階だけギャラリーにするつもりで義父に許可をもらっていましたが、でもある日一階で、趣味のフラメンコを踊ってみるととても気に入ってしまい、スタジオも兼ねたフリースペースにしてもらいました。当時は、スタジオというものがなかった時代で、イベントで私の踊りをみてフラメンコを習いたいという生徒さんが、遠くからここまで来てお稽古をしていました。一時期、手作りの照明で、落語会やミニコンサートも開催したこともあります。人が集まることを企画するのも好きなんです。

土蔵とフラメンコ

そのうちに、スペインから来た歌手やギタリストも、公演のあと、ここへ来てくれるようになりました。彼らにとってもお気に入りの場なんです。この漆喰壁に木でできた空間が、フラメンコの空気にあっている。踊りとギターとうた、そしてパルマ（手拍子）が一体となって、とてもあたたかい音がするんです。コンクリートの壁の部屋とは全く違う。また、土蔵の頑丈な扉で、音が漏れないという利点もある。当時は、フラメンコ人同士が呼び合ってショーに参加してたので、ギタリストも歌手も、自然に集まってきて、一緒に自分のフラメンコを追求することができたんです。

帝塚山音楽祭への出演

帝塚山音楽祭へは第一回目のアマチュア時代から出演していました。その時は、万代池公園で、雨でぐちゃぐちゃになった土を自分達で地ならしして、持ってきた板をひいて踊りました。まさにその場所が、今はアマチュアが参加するサブステージになったので、思い入れがあります。その後、音楽祭でお店で踊ったこともありますが、すぐ満員になってしまうので、このスタジオをストリートライブへの参加店舗に入れてもらうことにしたのです。

現在の音楽祭は、大規模になって、野外ステージも三つもできて、それは嬉しいことだと思います。ただ、最初の頃のように、参加者自身の手で舞台をつくることもなく、ちゃんとステージが準備されているので、恵まれすぎていて、新しい出演者が手作りの意味を含めた感動をどこまで味わえているのか疑問に思う時もあります。

帝塚山は気取りがないまち

私は東京出身ですが、帝塚山学院短期大学に通っていました。高校時代からモダンダンスにのめりこんでいて、帝塚山で教えている江口乙矢先生のもとへ通っていたんです。このまちは舞踊の本拠地なんです。もう亡くなられた大家政子さんのバレエスクール、西野バレエ団、モダンダンスは江口乙矢先生の所と、非常に有名な舞踊団が集まっています。短大生活は、本当にいい思い出です。まわりにかわいい店がたくさんあったので、友人と食事やお茶を楽しんだり、万代池公園で昼寝したり、大学とまちの規模がちょうどよかった。だから卒業後東京へ出て、再度戻ってきた時、短大がなくなっていたのは悲しかったです。

今は学生街ではなくなりましたが、いいお店は多いですね。ここは、高級住宅街といわ

れて芦屋などと比べられますが、このまちの特徴は、気取りがないことだと思います。最低限のマナーはありますが、押し付けがましくない。それは昔から。ステキな喫茶店の横に自転車屋さんがあったり魚屋があったりする。大邸宅もありますが、学生が下宿しているような「 荘」といった古い木造の家もある。三十万円のブラウスも売ってれば、百円の古着も売ってる。そういう意味では、大阪らしいです。全てがまざりあっていて、のどかでほのぼのしていますね。ちんちん電車もその1つで、大好きです。

初心を忘れない。帝塚山が、私のフラメンコ発祥の場。

帝塚山で、土蔵のスタジオを起点に本格的にフラメンコを始めるようになって、今では、生徒は六百人以上、スタジオも複数、便利な梅田や心斎橋にも設けました。ただ、やはり本気で続けたい人、さらに上を目指す人には、この帝塚山スタジオに来てもらってお稽古します。ここにしかない「場」だから、ここに来てもらうんです。

私は大劇場への出演だけでなく、本当に小さな劇場やレストランでのコンサートも大事にしています。最初にフラメンコに出会った感動を伝えたくて踊り続けてきたんです。フラメンコの良さは、何歳からでも始められ何歳まででも続けられる。そのレベルに関係なく、踊っている姿そのもので表現できる、感じてもらえると信じたい。だから、どんな小さな「場」でも、踊っている息や汗が伝わる場所がいいんです。

そういう、自分の初心を忘れないためにも、私のフラメンコ発祥の地でもあるこの土蔵のスタジオを大切にしていきたいと思っています。

写真 32 市川 恵子さん

33 土蔵を改造した「帝塚山スタジオ」

4 . 開かれる帝塚山～もうひとつの帝塚山文化～

帝塚山のまちを歩くと、なんとも気持ちがいい。上町線沿い、一本入った細い路地、高級なマンションやお屋敷が並ぶ通り、どの道もちゃんと掃除してある。お花、陶器、布小物、御菓子屋さん……裏通りにもできた小さなお店のディスプレイに、歩調をゆるめながら、ぶらぶら歩くと時間を忘れる。万代池公園まで出れば、緑と水辺に心癒される。

このまちで生まれ、事務所を構える、高田昇さん（COM計画研究所所長・立命館大学教授）は、帝塚山を、「人間がより人間らしく住めるまち」であり「“生活の場としての街づくり”が実現している。その意味で大阪でも先導的な役割を果たしている」と言う。住まいの周辺に緑や公園が充実しており、休日でも、そのまちで、食事や買い物、遊びがどれだけ楽しめるか、つまり、自然環境と文化的環境双方に恵まれたまち、帝塚山はその条件を満たしているということである。上町台地の歴史と自然がそのまま維持されており、また、船場の商家・まち衆の意気で、地元の人が、公園や学校に土地を提供し、自然と息づいた帝塚山文化は、いまなお健在だと言える。

大学の移転でまちに若い人の姿が減り、さらにマンション化が進み、「もう、昔のようなお屋敷まちではない」という声を幾度となく耳にした。大邸宅が並ぶ景観とステイタスはこのまちの強烈な個性であったが、今日それが崩れつつあるのは確かである。お屋敷まち

が残っても、ここへ住みたいと思う人が大金を出資しないと住めないという閉鎖的状況は好ましくない。しかし事情が許す限り、原風景を残す配慮は必要であろう。マンションになっても門構えや塀だけは昔のままであったり、まちなみの雰囲気にあわせて工夫された外観など、好感のもてる所も随所にあった。

「新しくできたマンションには、もちろん他のまちから来る人もいますが、結構地元の人が住むことも多いですね。親が子供のために、マンションを買っておく例もあるようです。」高田昇さんによると、帝塚山には、先祖の代からこのまちに住み続け、その子供が成長して帰って来ることを願う親御さんが多いそうだ。地縁的な要素が強いため、顔見知りも多いという。「お醤油やお米の貸し借りをするような昔の下町長屋のコミュニティはもちろんありませんが、プライバシーに立ち入りすぎない、現代的な都会的なコミュニティは育成されていると思います」。高田さんにより、老朽化したマンションなど放っておくと高齢化する空き屋になるような古い住宅が、現代的にアレンジされて建替えられるなど、そのまちに住みたい人が住み続けられるようなまちづくりが行われている。

一時期の学生による華やぎは薄らいだものの、帝塚山はその独特の文化の発信基地である。大小に関わらずいいお店が多い。自宅の一部（一階部分であったり蔵であったりする）を改造して、割烹料亭や喫茶店にした所もあれば、和食レストランで、そこへ通う主婦の要望で料理講習を行う「旬菜」というお店もあり、「ラグタイム」のように、お客さんの発案でジャズライブを始めた店もある。ちんちん電車を応援する“ちん電グッズ”を置くお店「マイハウス」からも地域へのやさしい眼差しが感じられる。有名な老舗も昔ながらの味を守り続け、ファンは絶えない。散歩がてら、ふらりと立ち寄れるような、小さな路面店が帝塚山にはよく似合う。このまちでは、地域のお客様の声を大切にしながら、“好き”だから“こだわる”というお店が自然に集まり、育っていくという不思議な力が備わっているようにも思える。（逆に、お客様のニーズをうまくつかめず、帝塚山ブランドや高級路線を掲げて出店している所は、成功していないようだ。）

さらに、有識者や舞踊研究家など、都市文化を支える多くの著名人が、この街を拠点にして活動しているのも、偶然ではないだろう。常設の文化施設、コンサートホールやギャラリーがあればさらに文化的土壌が育まれるかもしれない。一方で、その施設がなかったからこそ、いろいろな店舗がライブハウスになったり、公園がステージになったり、古い蔵が踊りの稽古場になったりと、既設の空間を、既成の枠組みにとらわれずに再活用しようというエネルギーや知恵が生まれた。その結果、ここにしかないオリジナルの「場」やエンターテインメントが生まれ、人々の共感を得て、驚くほどの発信力・集客力を発揮している。それは、高級住宅街のステイタスや上品さだけでは語れない、もうひとつの新・帝塚山文化である。

古代ロマンを秘めた旧跡があちこちに点在し、それらを資産として維持してきたという住民の努力が積み重なったこの地域で、今、お屋敷まちが持っていた独特の良さ、その原風景や富裕性を大切に生かしながら、新しい時代に応じたまちづくりや「場」づくりが実践されている。新旧の文化が織り交ざることで、帝塚山はゆるやかに開き、さらに住み続けたいまちへと変わっていくに違いない。

おわり

取材にあたり、難波利三さん、難波りんごさん、朝陽学院の小西欣一さんにも大変お世話になった。どうもありがとうございました。

参考文献

- 住吉村誌 財団法人住吉村常盤会編纂
住吉区史
あべの今昔物語 猿田博 著
私たちの阿倍野 難波りんご著
大阪の歴史と風土1 毎日放送文化双書
阪堺100年
大阪人VOL54
住吉名勝図会
伸びゆく阿倍野 川端直正
河内平野の生い立ち 大阪市立自然史博物館
熊野街道 住吉史跡めぐり 大阪市制100周年住吉区記念事業実行委員会・
(財)住吉区コミュニティ協会
大阪春秋 大阪の乗り物
大阪ストーリー (1990年4月、1992年7・8月号) 朝日新聞
大阪新発見散歩 昭文社

- 写真34 故大家政子さんの自宅とバレエスクールの跡地は、
ケア付高齢者住宅になる予定
- 35 土蔵を改造して喫茶店にした「POINT」
 - 36 「福寿堂秀信」は和菓子の老舗(店内)
 - 37 ちん電グッズを置く「マイハウス」
 - 38 39 小物雑貨のお店をのぞくのも楽しい (どちらか1つ?)
 - 40 「白い家」のケーキやプリンもファンが絶えない
 - 41 椿館
 - 42 (特になし)